

知識・技術・態度を総合的にアセスメントする 評価法導入の妥当性 ～母性看護学実習前と実習後のSense of Coherenceとの関連～

Relevance of introducing evaluation method
to comprehensively assess knowledge, technology and attitude.
～ Relationship with Sense of Coherence before and after practical
training of maternity nursing ～

前山 直美 原田 美枝子 菊池 美保子

Naomi MAEYAMA, Mieko HARADA, Mihoko KIKUCHI
(神奈川歯科大学短期大学部 看護学科)

キーワード：ループリック 首尾一貫感覚 看護学生 臨地実習

要旨

〔目的〕 知識・技術・態度を総合的にアセスメントする評価法導入の妥当性をストレス対処能力・健康保持能力の形成に繋がるSense of Coherence (SOC略) との関連で明らかにし、看護教育への示唆を得ることを目的とした。

〔方法〕 研究同意が得られた本学3年生男性8名、女性71名の計79名(平均年齢21.4±4歳)に臨地実習1～2週間前と臨地実習終了日に日本語版SOC短縮版尺度13項目を調査した。SOC得点の中央値でSOC高群と低群に二分しSOC得点、SOCの3要素の平均得点と形成評価との関連性を分析した。

〔結果〕 1. 母性看護学実習前と実習後のSOCの3要素の変化では、「把握可能感」に有意差を認めた ($p<.05$)。SOC得点、SOCの3要素は臨地実習後が実習前に比べ全て高い結果だった。

2. SOC高低群のSOCの3要素を比較した結果、臨地実習前は「有意味感」、「把握可能感」に有意差を認め ($p<.05$)、臨地実習後はSOC 3要素「有意味感」「処理可能感」「把握可能感」全てに有意差を認めた ($p<.001$)。

〔結論〕 知識・技術・態度を総合的にアセスメントするループリック評価は、SOCの3要素を高めストレスフルな臨地実習に対し首尾一貫感覚を育てるツールとして活用できる。

はじめに

「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」¹⁾によれば、近年、知識習得から能力獲得へと「学習」の概念が変化してきている中で、看護師教育において培う実践能力は、知識・思考・行動の統合を通して発揮されるもので単に知識の保有量で評価できるものではなく、看護師教育を担う教員の今後の課題は、学生の能力を評価する方法の開発と研鑽であるとされている。学生の能力を公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指した取り組みとして、カナダやアメリカの大学教育に広く活用されて

いるループリック評価がある。これは学習活動に応じた具体的な到達目標の「評価規準」と、どの程度達成できればどの評点を与えるかの特徴の記述の「評価基準」のマトリックスで示された配点表を用いた成績評価方法のことである²⁾。「思考・判断」「関心・意欲・態度」「技能・表現」の全ての評価方法に適していることや、成績評価の公平性、客観性、厳格性を増大させるのみならず、学習者への事前提示やフィードバックを通して形成評価や協働学習支援にも有効である³⁾といわれ、日本の小中学校においても教育評価の領域で重要視されている⁴⁾。

一方、国内の大学においては学習成果の明示化に関する法令の整備が急速に進み、学習者の学修成果に係る評

受付日 2016年11月18日

受理 2016年12月20日

価値基準の明確化と公表の義務化が明言され、ルーブリック評価や学修ポートフォリオ評価が求められることになった⁵⁾。

知識・思考・行動の統合を通して発揮される臨地実習は、学習者自身の看護の学び、自己成長の機会となる貴重な体験である。しかし、その一方で、臨地実習中のストレスや不安について、これまで数多く報告され^{6) 7) 8) 9)}、対人関係能力やコミュニケーション能力の育成のみならずストレス対処能力と言われているSense of Coherence (以下SOC)を高めていくことが重要である¹⁰⁾と考えられている。

SOC (首尾一貫感覚)とは、1979年アロン・アントノフスキーによって構築された健康生成論の中核概念¹¹⁾で、「非常にストレスフルな経験をしながらも健康に生きる人々が保有する力」とされている。SOCは有意味感、処理可能感、把握可能感、の3要素からなり、有意味感とは「日々の営みにやりがいや生きる意味が感じられる感覚」、処理可能感とは「どんな出来事に対しても自分なら何とか切り抜けられる、何とかやっていると信じられる感覚」、把握可能感とは「自分のおかれている状況が予測でき、理解できる感覚」とされている。SOCを育む良質な経験「一貫性のある経験」「バランスのとれた負荷の経験」「結果形成への参加の経験」は、ストレス対処能力・健康保持能力の形成に繋がる¹²⁾とされている。しかし看護学生のSOCを育む良質な経験「一貫性のある経験」「バランスのとれた負荷の経験」「結果形成への参加の経験」の臨地実習にするには、どのような教育や評価が必要であるか検討した研究は見当たらない。そこで、臨地実習を通して学生自身の成長を自覚できる良質な経験になるように、プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたルーブリックを用いた評価を導入した。母性看護学臨地実習で学生が受け持てる選定条件は分娩・産褥期および新生児期の対象者である。選定条件に満たない状況が想定できることがあるため〈状況によって〉の評価基準を追加設定した。教員は学生の気づきや学びを重視し思考を刺激するメタ認知教師としてかわり、ルーブリックを活用しながら学生自身が形成的評価を行ない、課題を見出し、進める実習に転換した。

本研究の概念枠組みを図1に示した。看護学生の臨地実習の指導と評価の一体化を目的に導入したルーブリック評価の妥当性をストレス対処能力・健康保持能力の形成に繋がるSOCの3要素との関連で明らかにしたので報告する。

I. 研究目的

看護学生の臨地実習を知識・技能・態度の総合的・客観的にアセスメントするルーブリック評価導入の妥当性

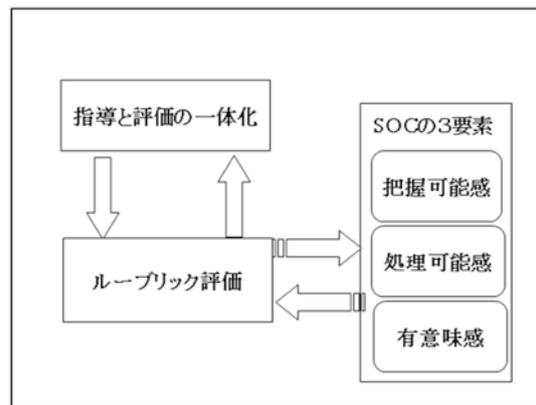


図1. 研究の概念枠組み

をSOCとの関連で明らかにし、看護教育への示唆を得る。

II. 研究方法

1. 調査対象者：平成27年度母性看護学臨地実習を履修し、研究同意が得られ看護系短期大学に在籍する3年生。
2. 研究期間：平成27年4月～平成28年10月。
3. 調査方法：母性看護学実習1～2週間前に行われる直前オリエンテーション時と臨地実習修了の帰学日時に自記式質問紙を配布し、留め置き法にて回収した。

4. 調査内容

1) 質問紙の構成

- (1) 基本属性 (年齢、性別)
- (2) 日本語版SOC短縮版尺度13項目：有意味感4項目、処理可能感4項目、把握可能感5項目から構成されている。「とてもよくある」から「まったくない」までの7段階で評価し、得点率が高いほどストレス対処能力・健康保持能力が高いとされている。なお事前に使用許可を得たうえで使用した。

2) ルーブリック評価基準「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の達成度

ルーブリック評価表はプロジェクト学習を取り入れている他校の講師による研修会を繰り返し受講し、研究者中心に母性領域担当教員と作成した。母性看護学臨地実習において学生の真の学びと成長を正當に評価するために、評価する目的やねらいを決定し、評価の内容と範囲の決定、場面の設定、評価の時期の決定、評価資料等の決定を行った。そして学習活動に応じたより具体的な到達目標とどの程度達成できればどの評点を与えるかの特徴を一文で記述した評価基準を作成した。具体的には評価基準「関心・意欲・態度」は学ぶ力を支える意欲や積極性、責任感、持続性などの情意的側面で6評価基準とした。「思考・判断」は学ぶ力を構成する高次知的・思考技能で8評価基準とした。「技能・表現」は「関心・

意欲・態度」と「思考・判断」を学修した結果、身についた能力で7評価規準とした。「知識・理解」は「関心・意欲・態度」に支えられ「思考・判断」を働かせながら学習し創造した概念や知識などで2評価規準とした。以上母性看護学臨地実習のルーブリック評価は23評価規準で構成している。そのうち19評価規準を〈必須〉とし、4評価規準を〈状況で〉とした。各到達目標である評価基準を3段階評価としA評価（5点）：十分に満足できる達成状態、B評価（3点）：おおむね達成できる状態、C評価（0点）：何も達成できない状態とした。

5. 分析方法：基礎集計後の統計解析はExcel2010を使用した。SOC得点の中央値でSOC高群と低群に二分しSOC得点、SOCの3要素の平均得点のt検定を行った。統計学的処理について有意差の判定は危険率5%以下を有意とした。

Ⅲ. 倫理的配慮

本研究はA大学研究倫理委員会の承認を得た後に実施した（承認番号第311）。

対象者には、事前に研究の目的及び方法、研究への参加は自由意思であること、また研究への参加有無が学業成績や単位認定に全く影響がないこと、個人のプライバシーは完全に守られていることを明記した文書で説明し、データ使用と公表の承認を得た。

Ⅳ. 結果

1. 研究対象者の概要

研究対象は、研究同意が得られた看護系短期大学3年生で男性8名、女性71名の計79名であり、平均年齢21.4±4歳であった。

2. 臨地実習前・実習後のSOC総得点とSOC高低群別SOC 3要素の関係

母性看護学臨地実習前と実習後のSOCの3要素の各々の得点を表1に示した。臨地実習前のSOCの平均得点は54.8点で、最高は77点、最低は33点であった。

有意味感は、平均18.9点、SOC高群の学生は21.7点、SOC低群の学生は16.8点であった。処理可能感は平均得点16.8点、SOC高群の学生は20.1点、SOC低群の学生は14.4点であった。把握可能感は、平均得点19.1点、SOC高群の学生は22.9点、SOC低群の学生は16.2点であった。

一方、臨地実習後のSOCの平均点は56.1点で、最高は86点、最低は26点であった。有意味感は、平均19.0点、SOC高群の学生は21.2点、SOC低群の学生は17.3点であった。処理可能感は平均得点17.0点、SOC高群の学生は19.6点、SOC低群の学生は15.0点であった。把握可能感は、平均得点20.0点、SOC高群の学生は23.4点、SOC低群の学生は17.6点であった。

以上から臨地実習前と臨地実習後のSOCの3要素の変化をみると、把握可能感に有意差を認めた（ $p<.05$ ）。SOC得点、SOCの3要素は臨地実習後が実習前に比べ全て高い結果だった。

SOC高低群のSOCの3要素を比較した結果、臨地実習前には有意味感、把握可能感に有意差を認め（ $p<.05$ ）、臨地実習後は有意味感、処理可能感、把握可能感のSOCの3要素全てに有意差が認められた（ $p<.001$ ）。

3. ルーブリック評価規準達成度

ルーブリック評価規準「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の達成度を図2に示した。「関心・意欲・態度」4.3点で86%、「思考・判断」3.9点で78%、「技能・表現」4.0点で80%、「知識・理解」3.8点で76%とすべての評価規準が高得点であり、バランス

表1 実習前・実習後のSOC総得点とSOC高低群別SOC 3要素の関係

| | SOC 3要素の関係 | | | |
|--------------|-------------|------------|------------|------------|
| | SOC得点 | 有意味感 | 処理可能感 | 把握可能感 |
| 実習前 | 54.8 (10.2) | 18.9 (3.8) | 16.8 (4.0) | 19.1 (4.6) |
| SOC高群 (n=34) | 64.8 (5.6) | 21.7 (2.2) | 20.1 (2.8) | 22.9 (3.0) |
| SOC低群 (n=45) | 47.4 (5.3) | 16.8 (3.3) | 14.4 (2.8) | 16.2 (3.2) |
| 実習後 | 56.1 (10.6) | 19.0 (3.8) | 17.0 (3.9) | 20.0 (5.2) |
| SOC高群 (n=34) | 64.1 (8.1) | 21.2 (3.0) | 19.6 (3.2) | 23.4 (4.2) |
| SOC低群 (n=45) | 50 (8.0) | 17.3 (3.5) | 15.0 (3.3) | 17.6 (4.4) |

()内は標準偏差を表す ** $p<.001$ * $p<.05$

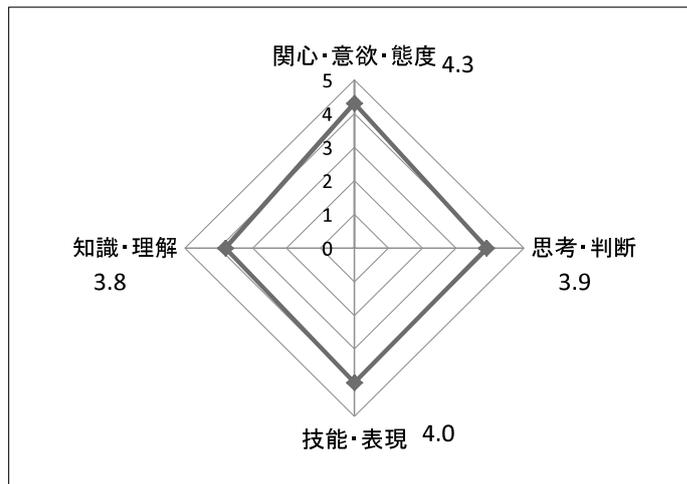


図2. 評価規準達成度 (5点満点) n=79

よく達成できていた。

V. 考察

1. 臨地実習前・実習後のSOC総得点とSOC高低群別

SOC 3要素の関係

先行研究¹³⁾によると一般成人のSOCの平均は57.0点であり、本研究では、実習前SOCの平均は54.8点、実習後SOCの平均は56.1点といずれも低い得点だった。つまり本研究対象者はSOCの機能と効果であるストレス対処力・健康保持能力が一般成人に比べ低いことがわかった。低い理由について先行研究¹⁴⁾ではSOCを発達させる凡抵抗資源に重要な環境が決定される30歳代までSOCは発達するとされている。本研究対象者の平均年齢は21.4歳±4歳であり、SOC確立途上にあると推測できる。SOCは生育環境で形成され、職業体験を通して確立されるといわれている。とりわけ看護学生の場合、臨地実習体験を通して様々な問題や要求に対し、ストレス対処スキル、対人関係スキル、自己意識、批判的思考、多面的な思考、コミュニケーション力を発揮し対応している。高いSOCを持つ人の特徴として、自分と向き合う姿勢、前向きで多面的な思考、他者へのコミュニケーションの積極性などが指摘されている¹⁵⁾。本研究では臨地実習前に比べ臨地実習後のSOC得点、SOCの3要素の有意義感、処理可能感、把握可能感の全てにおいて上昇へと変化した。SOCが周囲の環境により、また環境との相互作用である経験により左右され、良質な経験を通してストレス対処能力が強化されていく¹⁶⁾ことから、臨地実習でいい経験を積み重ねることによりSOCを育むことができると考える。

SOC低群の学生は、臨地実習前の有意義感、把握可能感についてSOC高群の学生と比べ、有意な差を認めた。このことはSOC低群の学生は臨地実習の目的・目標が明確でなく実習の意味を見出せない。また実習での出来事

や状況など、ある程度予測できると感じる感覚が低いことが示唆された。実習準備期間に有意義感、把握可能感を高めるサポート体制構築が必要であると考ええる。

2. ルーブリック評価導入の妥当性について

臨地実習における評価は、人間的状況因子などが関与し、学生や看護教員、臨床指導者の看護観などが影響するため必ずしも一致を求めることはできないと考える。

今回導入したルーブリック評価は、学習活動に応じた到達目標の「評価規準」とどの程度達成できればどの評点を与えるかの「評価基準」を明確にしたもので、学生の自己評価と看護教員・臨床指導者による他者評価との不一致が少なく、真正の評価につながったと考える。さらにルーブリックの評価規準、評価基準から学生は形成評価しながら課題を見つけ、次の実習活動に向けての目標設定を行い、自己学習力の刺激へとすすめることができていた。一方、教員は、学生の思考を刺激するメタ認知教師としてかわり、指導と評価の一体化を可能にしていた。

このことからSOCを育む良質な経験の「一貫性のある経験」「バランスのとれた負荷の経験」「結果形成への参加の経験」活動にいい影響を与えたと考える。

その結果、ルーブリック評価規準「関心・意欲・態度」86%、「思考・判断」78%、「技能・表現」80%、「知識・理解」76%とすべての評価規準が高得点を示したと考える。

以上のことから、知識・技術・態度面を総合的にアセスメントする目的で導入した絶対評価規準のルーブリック評価は評価法として妥当性があると考ええる。

VI. 結論

母性看護学実習の指導と評価の一体化をめざし作成したルーブリック評価の妥当性をSOCとの関連で明らか

にした。

1. 臨地実習前と臨地実習後のSOCの3要素の変化をみると、把握可能感に有意差を認めた ($p<.05$)。SOC得点、SOCの3要素は臨地実習後が実習前に比べ全て高値に変化した。
2. SOC高低群のSOCの3要素を比較した結果、臨地実習前は有意味感、把握可能感に有意差を認め ($p<.05$)、臨地実習後はSOC 3要素「有意味感」「処理可能感」「把握可能感」全てに有意差を認めた ($p<.001$)。
3. 知識・技術・態度を総合的にアセスメントするルーブリック評価は、SOCの3要素を高めストレスフルな臨地実習に対し首尾一貫感覚を育てるツールとして活用できる。

Ⅶ. 謝辞

本研究にご協力頂いた学生の皆様に深く感謝致します。

(本研究は、第46回日本看護学会—ヘルスプロモーション—学術集会において発表した一部を加筆・修正したものである。)

本論文内容に関連する利益相反事項はない。

引用文献

- 1) 厚生労働省 (2011), 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書, 2014年7月1日閲覧,
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/att/2r98520000013l4m.pdf>.
- 2) 沖 裕貴: 大学におけるルーブリック評価導入の実際—公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して—, 立命館高等教育研究, 14, p.71-90, 2014.
- 3) 梶田叡一: 教育評価 (第2版補訂版), 有斐閣双書, p.164, 2005.
- 4) 山口陽弘: 教育評価におけるルーブリック作成のためのいくつかのヒントの提案—パフォーマンス評価とポートフォリオ評価に着目して—, 群馬大学教育学部紀要, 62, p.157-168, 2013.
- 5) 前掲載2), p.72.
- 6) 大山由紀子, 沖野良枝, 前川直美他: 看護学生の臨地実習における態度に関連する要因と体験による変化の分析 (第2報)—首尾一貫感覚 (SOC) との関連, 日本看護学会論文集, 看護教育, 35, p.127-129, 2004.
- 7) 江上千代美: 看護学生の首尾一貫感覚と精神健康度との関係, 心身健康科学 4 (2), p. 43-48, 2008.
- 8) 本江朝美, 高橋ゆかり, 桑田恵子他: 看護学生の不安に対する認知的評価とSense of Coherenceとの関連, 上武大学看護学部紀要, 5 (1), p.2-11, 2009.
- 9) 荒川千秋, 佐藤亜月子, 佐久間夕美子他: 看護大学生における実習のストレスに関する研究, 目白大学健

康科学研究, 3, p.61-66, 2010.

- 10) 本江朝美, 高橋ゆかり, 古市清美: 看護学生のSense of Coherenceと自己および他者に対する意識との関連, 上武大学看護学部紀要, 6 (2), 1-8, 2011.
- 11) Aaron Antonovsky: Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well, Jossey-Bass Publishers, San Francisco, 1987, 山崎喜比古, 吉井清子監訳: 健康の謎を解く, ストレス対処と健康保持のメカニズム, 有信堂, p.189-194, 2001.
- 12) 山崎喜比古, 戸ヶ里泰典: 思春期のストレス対処力SOC, 有信堂, p.42, 2011.
- 13) 山崎喜比古: 健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念SOC, Quality Nursing, 5 (10), p.81-88, 1999.
- 14) 前掲載7), p.46.
- 15) 嘉瀬貴祥, 上野雄己, 大石和男: 高いSense of Coherenceを持つ者のライフスキルの特徴と構造に関する探索的検討, パーソナリティ研究, 25 (1), p.93-96, 2016.
- 16) 全掲載13), p.87.

参考文献

- 1) 前山直美, 石川智子: プロジェクト学習とポートフォリオ評価を基盤としたルーブリックの導入効果, 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 3, p.7-14, 2016.
- 2) 菊池美保子, 原田美枝子, 前山直美: 小児看護学実習におけるSense of Coherence (SOC) とストレスとの関連—ルーブリックを導入して—, 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 3, 47-52, 2016.

著者への連絡先: 前山直美 〒238-8580 神奈川県横須賀市稲岡町82番地 神奈川歯科大学短期大学部看護学科

TEL: 046-822-8774 FAX: 046-822-8787

E-mail: maeyama@kdu.ac.jp.